日本の母親の乳児に対するかかわりの変化とその特性
―― 2017-18 年と 1994-95 年に生まれた乳児とその母親の行動比較を通して ――

寺見 陽子

神戸松蔭女子学院大学教育学部

Author's E-mail Address: y-terami@shoin.ac.jp

The characteristics and changes in mother and infant interactions in Japan: A comparison of interactions between mothers and children born between 2017-18 and 1994-95

TERAMI Yoko

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本研究は、今日の親子の関わりの課題とかかわりの質的向上を図る観点を導出するために、今日の母親の対乳児への関わりの特性を明らかにすることを目的とした。2017-18 年と 1994-95 年に生まれた 9 か月の乳児とその母親（各 3 組計 6 組）の家庭における自由遊びを 30 分間 VTR に収録し、共同注意に着目して分析を行った。黒木・大神による尺度を用いて 30 分間の後半の 10 分を 10 秒ごとに区切り、分析した。さらに VTR の逐次記録を作成し、発話数（統語的切れ目）、発話のユニットを算出した。比較を行った結果、多くの項目で 1994-95 年より 2017-18 の方が減少しており、特に発話数は二分の一となっていた。こうした結果から見て、今日の母子の関わりの質を高めるためには、養育者の言葉かけや親自身の自己表現力を高める必要があると推察された。

The purpose of this research is to explore the characteristics of mothers' interactions with their infant children in order to improve the qualitative interactions between parents and children. The study compared verbal interactions of mother and infant dyads of children born between 2017-18 and 1994-95 (3 pairs each, a total of 6 pairs) by videotaping 30 minutes of free play in their respective homes. Following Kuroki and Ogami's methodology, the videotaped data was analyzed every 10

Journal of Kobe Shoin Women's University, No. 1（March 2020）, *123–134*.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要 No. 1（2020 年 3 月）, *123–134*.

seconds for 10 minutes in the latter half of the 30 minute video. The videotaped data was transcribed and the frequency of word utterances (syntactic unit) and units of conversation were counted. A comparison of this data suggests an overall decline in frequency in 2017-18 compared to 1994-95. The units of utterance shown in 2017-18 were only half the ones in 1994-95. The results suggest that in order to enhance the quality of mother-child interactions, mothers' verbal interactions and ability to express themselves need to be improved.

キーワード：9 ヶ月児、母子、共同注意、相互作用、特性と変化
Key Words: 9 month-old, mother-infant, joint attention, interactions, characteristics and changes

【はじめに】

近年、新しいタイプの言葉の遅れが乳幼児にみられるようになったという（片岡、2009）。音、光環境に反応するが、親が呼んでも振り向かない、目を合わさない、母を見ず母の持つ食べモノに興味を示すなどの共通した特性をもち、病院で自閉症と診断される場合もある。乳幼児の場合、こうした反応が発達の一過的現象として現れることもあり、発達的な問題かどうか見極めが難しいといわれる。

筆者は、これまで子育て講座や支援の実践に長年携わってきたが、最近、筆者の世代には違和感のある光景によく出会う。我が子を机の上に寝かせ、左手で哺乳瓶を口にくわえさせたまま、スマホやママ友とおしゃべりをしたりする。聞けば、抱っこしたら泣くので抱っこして飲ませたことがないという。泣き始めるとスマホのアプリを見せて、「あやす」様子は見られない。親子散歩では、親が先に行ってしまい、もたもた歩く子どもに遠くから「早くおいで」といってスマホをしながら待つ。

子育ては、子ども（他者）のために生きることが求められる。学校では自己表現と主体的に生きる教育を受け、自分の子どもとはかかわったことのないに、子どもができると、子どもと向き合い、子ども中心に世話やしつけをしなければならない。その藤克服過程の中に、親になる育ちの過程があるが、ストレスフルである。つい、メディアに頼ってしまうことは致し方ないのかもしれない。

日本小児科学会が 2003 年に 17 ヵ月から 19 ヵ月を対象に行った調査では、1 日 4 時間以上の子ども（長時間視聴児）は、4 時間未満の子どもに比べ、有意語出現の遅れの率が 1.3 倍という結果を示しており、子どもの言葉の遅れが危惧される。既に 15 年以上経過したいま、乳児期の養育者とのコミュニケーションがさらに変容してきているのではないかと推察される。今日の乳児期の子どもと養育者のかかわりは、さらに変化してきているのではないかと思われる。

今日の母親の関わりは、実際、変わったのだろうか。もし、変わったのであるなら、何が、どのように変わったのだろうか。メディアに頼る養育者が増加する今日、人間性の基盤のできる重要な乳児期の養育者の関わりを見直し、積極的に支援する必要があろう。本研究は、そうした観点から、今日の養育者の対乳児との関わりの変容を明らかにするとともに、乳児

養育・保育の質の向上を図る観点を導出するために行われた予備研究である。

【目的】

乳幼児期は、人間性の基盤が形成されるときである（Erickson、1960）。特に乳児期は養育者の保護と世話を受けながら生理的適応を果たし、その養育者と愛着の絆で結ばれ、人への基本的な信頼感を獲得するという、生物的なヒトから、社会的存在の人となる基盤が形成されるときである。乳児は、特定の人からの世話を受けながら、その人のかかわりを通して、共同注意から並列的な二項関係へ、そしてモノを介在した三項関係へと変化し、回りのモノや場（外界）、意味や感情をその人と共有し、人と自分の間に間主観的空間を感受するようになる（Trevarthen & Hubley, 1978）。このような、自分―人（二項関係）や自分－モノ－人（三項関係）の関係の生成は、その後の言語の発達の基盤（Scaife & Bruner, 1975）や社会的コミュニケーションの先駆体が形成される。

そうした発達の変化は、6 か月頃から現出し、9 か月頃に養育者と自発的に共同するようになり（Tomasello, 1993）、13 か月頃に言語コードが入り込んで養育者とコミットメントできるようになり、18 か月頃から空間表象的になるとされる（Adamson & MacArthur, 1995;Bakeman & Adamson, 1984）。二項関係から三項関係への変化は、乳児の認定的な発達に負うところが大きいが、はじめは親からの刺激によって引き起こされ、やがて乳児は目を引く環境（例えば、モノの図柄やおもちゃ等）や相手の意図性に誘引されるようになる。つまり、養育者の果たす役割が重要であることが指摘されている。

この過程で成立する、同一の対象に対して注意を共有している状 態は、共 同 注 意（joint attention）と呼ばれる。この共同注意の概念は、乳幼児期においてコミュニケーションの構造が自己一他者という二項関係から三項関係へと移行する際に重要のであり、その後のコミュニケーション発達の礎ともなる（Dunham, P.J.,　& Moore, 1995）。乳児の共同注意の研究に最初に取り組んだのは、Scaife and Bruner（1975）である。彼らは、「同じところをみる」という視覚的共同注意は生得的なものであるとした（Bruner, 1983/1988）。その後、この視覚的な注意の共有に関する数多くの実験的な研究がなされ、乳児は生後 9 力月齢から 12 力月齢ごろに他者の見ているモノに注目するなど他者と視線を共有することが明らかにされた（Butterworth, 1995、Tomasello, 1995、矢藤 , 2007）。Butterworth（1995）は、子どもが養育者の視線を後追いする視覚的共同注意に注目し、「誰かが見ているところを見る」ことと定義し、これは生態学的メカニズムによるものであるとした。それに対して、Baron-Cohen（1995）は、他者の視線方向を読み取る「視線検出器」と自分と他者が同一対象に注意を向けているかという「注意共有メカニズム」という 2 つの神経学的メカニズムを想定し、共同注意に自分と他者の注意が共有されていることの「理解」を提議に含めた。一方、Tomasello（1995）は、ただ単に養育者と子どもの視線が同じ対象に向いているというだけでなく、お互いに相手の対象への注意をモニタリングして二者の注意の焦点が共有されている状態であるとし、他者を意図的行為主体として理解していることが共同注意成立であるとする。他者意図理解や表象などの概念も共同注意の定義の指標に含めている。

このように、共同注意の定義については、研究者によって様々な見解があり、未だ定義や内容の一致を見ていない。大藪（2003/2014）によれば、共同注意には、対面的共同注意、支持的共同注意、意図共有的共同注意、象徴共有的共同注意の 4 種類が想定されている。その共同注意の研究パラダイムを 2 つの基本タイプがあり、一つは、乳児と他者とが同一対象に注意（一般には視線）を向けたかどうか、その有無を問題にする「事象（event）型」、もう一つは、相手と同じ対象物に注意を向け合った場面で生じる現象、共同注意の持続的場面で生じる行動を問題にする「状態（state）型」である。いずれのタイプも、そこで観察される現象から、乳児の精神世界の働きを検討し、またそれらの共同注意が精神発達に果たす意義を見いだそうとする。

黒木・大神（2003）は、日常生活場面における共同注意の標準的な発達順序の確認、共同注意発達と他の発達指標との比較を可能にする、共同注意に遅れを持つ子どもの検出のために、共同注意行動を幅広く包括的にデータ収集し、共同注意発達評価法を開発している。

本研究では、母親と乳児の視覚的共同注意に注目して、2017-18 年と 1994-95 年に生まれた乳児とその母親の行動比較を試み、かかわりの質的向上を図る観点を導出するために、今日の母親の対乳児への関わりの変化とその特性について検討することを目的とし、2017-18 年の方が 1994-95 年よりも関わりが減少していると仮説設定した。

【方法】

（1）対象

9 か月時の乳児とその母親 6 組である。内訳は、2017-18 年に生まれた女児と母親計 3 組（以下 A 群とする）、1994-95 年に生まれた男児 1 名・女児 2 名とその母親計 3 組（以下 B 群とする）であった。

（2）手続き

筆者が協力者の自宅を訪問して、日常使用しているおもちゃを用いて母子が遊んでいるところを VTR に録画した。録画に際しては、母親にできるだけいつものように遊ぶようにお願いし、30 分間撮影した。

（3）分析方法

撮影した 30 分のうち後半 10 分を分析対象とした。VTR を 10 秒ごとに区切り、分析した。コードは、黒木・大神（2003）の尺度を参考に作成した。コーディングは心理学を専攻する 2 人の観察者によって行われ、一致率は kappa=.086 であった。また、その際に観察されなかったコードは削除し、最終的に、①発声　②情動表出　③叙述的身振り　④共同注意　⑤大人の視線　⑥子どもの視線　⑦接触　⑧指さし、8 コードを設定した（表 1）。さらに、VTR の逐次記録を作成し、発話数（統語的切れ目）、発話のユニット（遊びのテーマのくくり）の頻度を算出した。

表 1　コーディング項目と定義

コーディング項目		定義
発声	大人開始	母から声をかける
	子の応答	子どもがそれに応答する
	子開始	子から声をかける
	母の応答	母がそれに応答する
子の情動表出	快	子どもの快表出
	不快	子どもの不快表出
母の情動表出	快	母の快表出
	不快	母の不快表出
叙述的身振り	A: 母から子へ物の提示 / 手渡し	A.　子どもから母親へ の物の提示ないし手渡し A に応じた母 親の反応. B 母親から子ども への物の提示ないし手渡、B に応じた子どもの反応
	A に応じた子の反応	
	B：子から母へ物の提示 / 手渡し	
	B に応じた母の反応	
視線	同時注視（二人同じ物を見る）	子どもと母親が同じ物ないし人を 見ている
母の視線	視線追従（子ども）	母が子どもの視線を追う
	おもちゃ（自分＝母）	母が自分の持っているおもちゃを見る
	おもちゃ（子ども）	母が子どもの持っているおもちゃを見る
	子ども顔	母が子どもの顔を見る
	子ども体	母は子どもの体を見る
子の視線	視線追従（母）	子どもが母の視線を追う
	おもちゃ（自分＝子）	子どもが自分の持っているおもちゃを見る
	おもちゃ（大人）	子どもが母の持っているおもちゃを見る
	大人顔	母の顔を見る
	大人体	母の体を見る
接触	大人から接触	母から子どもにスキンシップする
	子どもから接触	子どもから母にスキンシップする

(4) 倫理審査：本研究は神戸松蔭女子学院大学大学倫理審査委員会の承認を得た後、各対象児の親に対し研究開始時に研究内容、実施方法、プライバシー保護に関する説明を行い、承諾書に署名を頂いた。また研究者側からも説明した内容に関する書類に署名し、協力者に手渡した。

【結果】

分析の結果は、表 2 に示した。

表２　分析結果

コーディング項目		群	M	SD	標準誤差
発声	大人開始	A	45.33	10.97	6.33
		B	57.00	2.65	1.53
	子応答	A			
		B			
	子開始	A	13.00	8.00	4.62
		B	13.33	5.13	2.96
	大人応答	A	6.33	2.52	1.45
		B	4.33	2.31	1.33
子情動表出	子快	A	7.33	2.52	1.45
		B	12.33	6.43	3.71
	子不快	A	7.00		
		B	3.00	1.41	1.00
大人情動表出	大人快	A	4.00	4.24	3.00
		B	12.67	4.93	2.85
	大人不快	A			
		B			
叙述的身振り	A大人から子供へ物の提示・手渡し	A	14.33	8.50	4.91
		B	28.00	8.19	4.73
	Aに応じた子どもの反応	A	5.33	2.31	1.33
		B	16.67	12.66	7.31
	B子から大人へ物の提供・手渡し	A	1.00		
		B	1.00	0.00	0.00
	Bに応じた大人の反応	A	1.00		
		B	1.00		
視線	同時注視	A	36.33	6.11	3.53
		B	46.67	7.77	4.48
大人視線	視線追従（子ども）	A			
		B	1.00		
	おもちゃ（自分＝大人）	A	25.33	11.59	6.69
		B	28.33	9.71	5.61
	おもちゃ（子ども）	A	27.33	7.64	4.41
		B	19.00	10.00	5.77
	子ども顔	A	44.00	11.53	6.66
		B	46.00	8.89	5.13
	子ども体	A	47.00	8.00	4.62
		B	53.67	5.69	3.28
子ども視線	視線追従（大人）	A			
		B			
	おもちゃ（自分＝子ども）	A	29.33	1.53	0.88
		B	23.67	11.50	6.64
	おもちゃ（大人）	A	18.67	5.51	3.18
		B	25.00	10.58	6.11
	大人顔	A	3.33	0.58	0.33
		B	24.00	5.00	2.89
	大人体	A	14.00	10.15	5.86
		B	34.67	13.43	7.75
接触	大人から接触	A	36.33	19.86	11.46
		B	23.33	15.01	8.67
	子どもから接触	A	29.00	9.90	7.00
		B	12.33	8.08	4.67
発話	発話数	A	33.00	11.53	6.66
		B	76.67	28.29	16.33
	ユニット	A	3.33	0.58	0.33
		B	5.33	1.53	0.88
相互性	母ーモノ—子ー母	A	5	2.65	1.53
		B	16.33	12.86	7.42

1. 発声と感情表出

母から子への発声（A:M=45.33, B:M=57.00）、子の快表現（A:M=7.33, B:M=12.33）、母の快表現（A:M=4.00, B:M=12.67）、母からの子へのモノの提示（A:M=14.33, B:M=28.00）、それに対する子の反応（A:M=5.33, B:M=16.67）、いずれも、A 群よりも B 群の方が圧倒的に多かった。

2. 叙述的身振り

お母から子どもへのモノの提示・手渡しは、A 群より B 群が多かった（A:M=14.33, B:M=28.00）。また、子どもから母へのものの提示・手渡しも A 群より B 群の方が多かった（A:M=5.33, B:M=16.67）。

3. 同時注視と視線

モノの同時注視（A:M=36.33, B:M=46.67）、母から子の顔や体にむける視線（顔 M=44.00, B:M=46.00、体 M=47.00, B:M=53.67）、子から母の顔や体に向ける視線（顔 M=3.33, B:M=24.00、体 M=14.00, B:M=34.67）などの行動は、A 群より B 群の方が高く、1994-95 年の母親の方が、2017-18 年の母親よりも反応が多かった。

また、A 群の母親は子どもの持っているおもちゃを見る（A:M=27.33, B:M=19.00）、子どもも自分の持っているおもちゃをみる（A:M=29.33, B:M=23.67）ことが多かった。B 群では反対に、母親は自分の持っているおもちゃを見る（A:M = 25.33, B:M=28.33）、子どもも母親の持つおもちゃを見る（A:M=18.67,:M=25.00）ことが多かった。

4. 接触行動

一方、A 群の方は、母からの接触行動（A:M=36.33, B:M=23.33）、子からの接触行動（A:M=29.00, B:M=12.33）が多かった。

5. 発話と発話ユニット

発話に関しては B 群の方が約 2 倍（A:M=33.00, B:M=76.67）であり、発話のユニットも B 群の方が多かった（A:M=3.33, B:M=5.33）。

6. 相互性

同時注視の前後に起こる母⇒モノ⇒子⇒母という相互性は、A 群より B 群が圧倒的に多かった（A:M = 5.00, B:M=16.33）。図 1 は 1994-95 年、図 2 は 2017-18 年の相互性のパターンを示したものである。

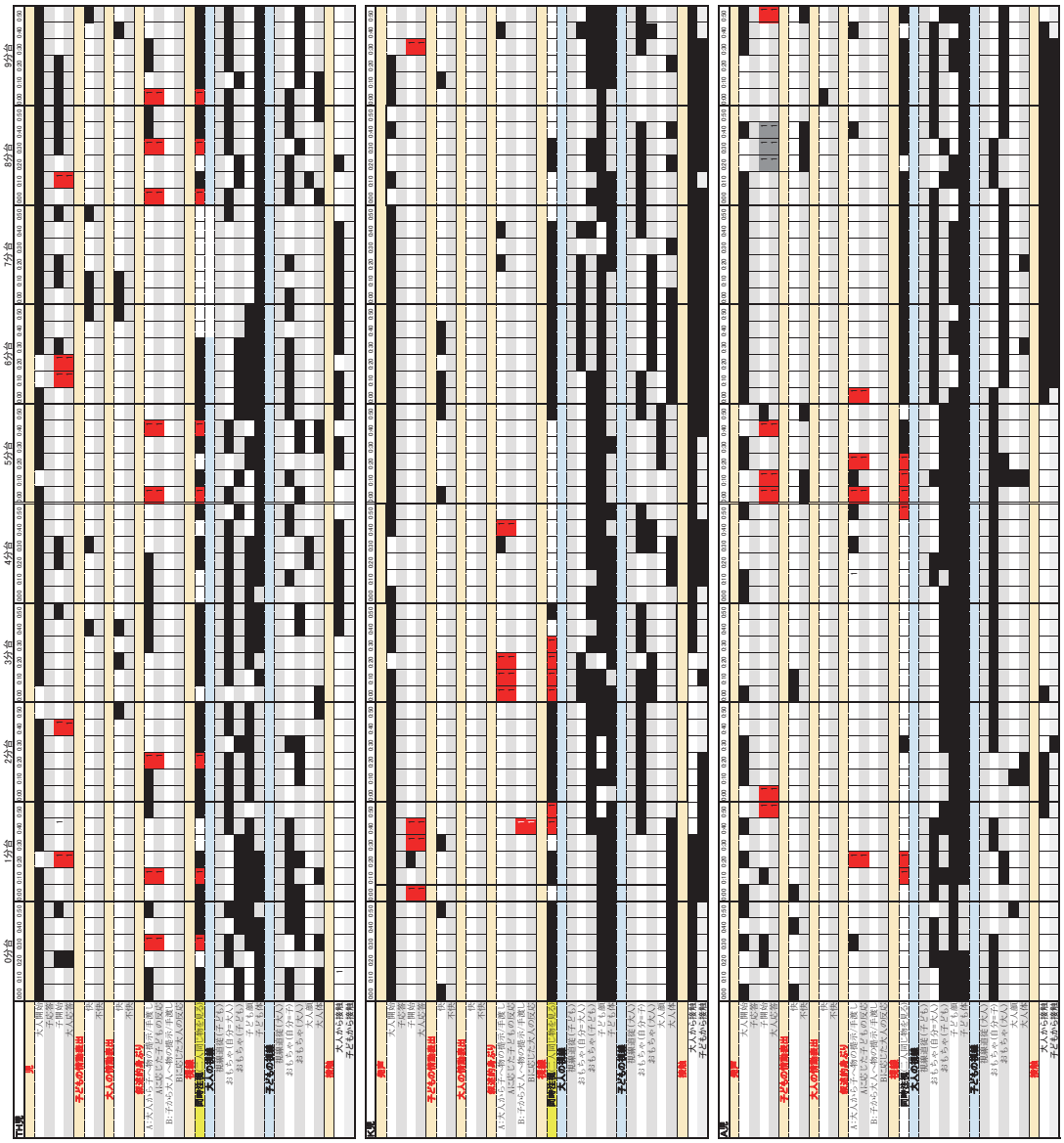

図１　A 群　2017-18 年の母子　■生起時間　■相互性

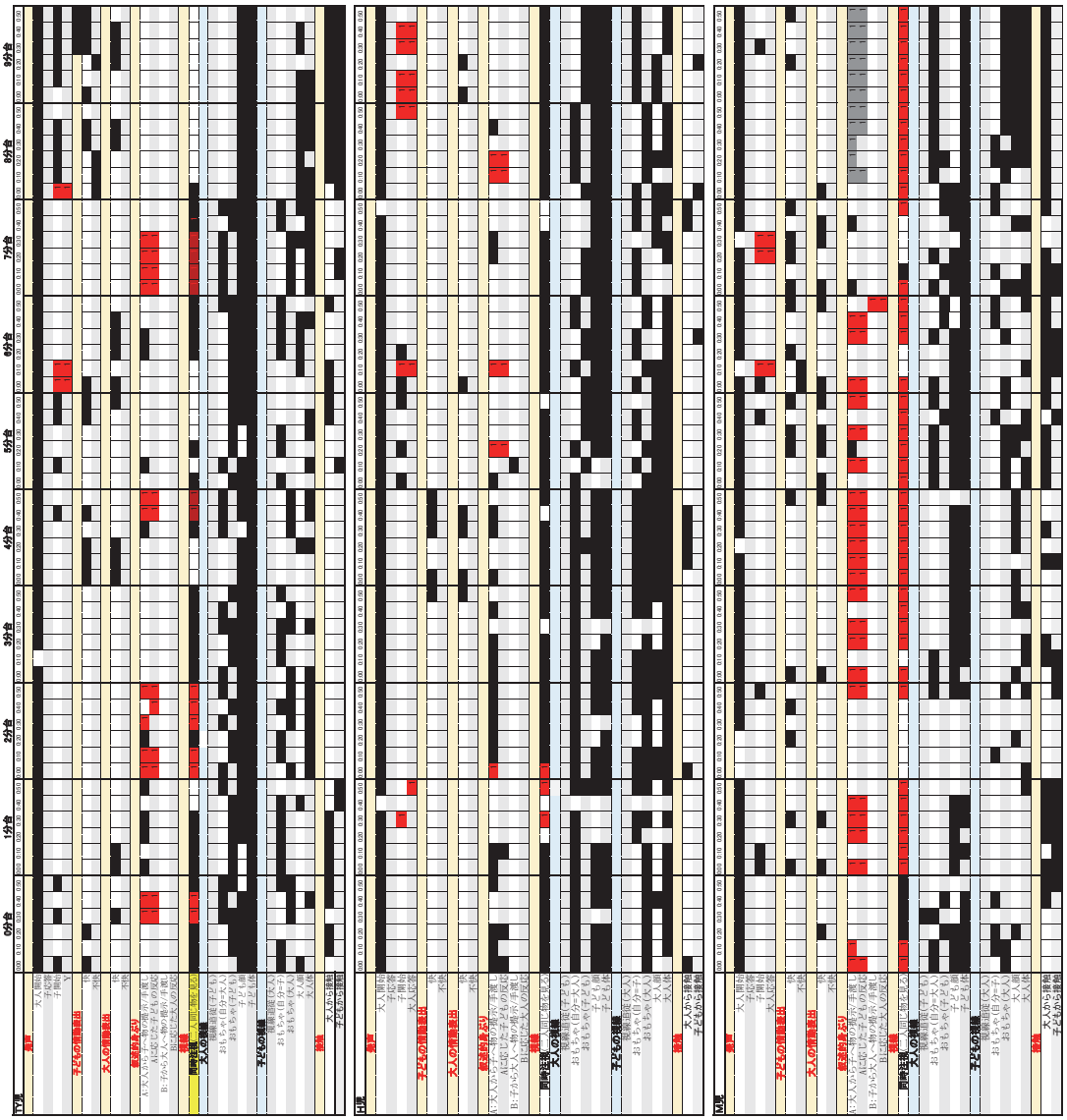

図 2　B 群　1994 － 95 の母子　■生起時間　□相互性

【考察】

本研究は、乳児と母親の関わりの質を高めるプログラム開発のための予備的研究である。

母親と乳児の視覚的共同注意に注目して、2017-18 年と 1994-95 年に生まれた乳児とその母親の行動比較し、今日の母親の対乳児への関わりの変化とその特性について検討した。2017-18 年の方が 1994-95 年よりも関わりが減少しているであろうという仮説のもとに行った。

本研究の結果からは、ほとんどの項目で、1994-95 年の母子よりも 2017-18 年の方が減少しており、仮説は支持された。特に発話数は 2017-18 年の方が 1994-95 年よりかなり少なく、二分の一となっていた。本研究では対象が少ないため、あえて統計的な処理は行わなかった。今後さらに対象を増やし、父親とのかかわりも含めて詳細な検討を重ねていくことが課題である。しかし、こうした結果から見て、親子の関わりの質を高めるためには、養育者の言葉かけや親自身の語り掛けの自己表現力を高める必要があると推察される。

乳児期は、対人行動や関係形成の基盤となる愛着形成が重要な時期である。乳児期は子育てへの不安やストレスが最も大きく、支援の課題としては、不安やストレスの軽減、子育ての知識や愛着形成に援助の主軸がおかれる。今日、赤ちゃんプログラムとしては、例えば、PB プログラム「赤ちゃんが来た」（原田正文、2018）、アタッチメント理論に基づくビデオを用いた COS プログラム（Cooper, G., Hoffman, T., & Powell, B. & Mavin, R., 2005）等の、有資格者による要望的開発的なプログラムや、治療的なプログラムがある。しかし、語り掛けの質を高めるための、日常の生活の中で関わりを学ぶことができる支援の在り方を考えていく必要があろう。

謝辞：本研究の作成に当たり、本研究の調査にご協力くださいました赤ちゃんとそのご両親様に心よりお礼申し上げます。また、データ収集と分析に関して、大阪保育総合大学の小椋たみ子教授、神戸松蔭女子大学心理学科の久津木文准教授、榊原久直講師、から貴重なご助言と援助を賜りました。心より感謝とお礼を申し上げます。さらに、分析においては、神戸松蔭女子学院大学大学院生の山下千尋様、米田なお子様、吉川つつみ様のご協力を頂きました。公認心理師試験で忙しい中を本当にありがとうございました。

追記：本研究は日本発達心理学会第 31 大会で発表したものを修正・加筆したものである。また本研究は平成 28 年度科研費基盤研究 C（課題番号：16K01899）研究代表者：寺見陽子）による研究の一部である。

【文献】

Adamson, L., & McArthuT, D.（1995）Joint attention, affectand culture. In Moore, C. Dunham J. P.（Eds）*Joint attention It's origin and role in development* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Association. pp.189-204

Baron-Cohen, S. 1989 Joint-attention deficits in autism: Towards a cognitive analysis. Development

and Psychopathology, 1, 185-189.

Bakeman, R. & Adamson, L.B.,（1984）Coordinated attention to people and objects in mother-infant interaction. Child Development, 55, 1278-1289, 1984

Bruner, J.S., 1983/1988 Child's Talk.: Learning to use anguage. Oxford University Press.（寺田晃他訳 乳児の話しことば―コミュニケーションの学習―新曜社）

Butterwoth, G. E.（1995）Origin of mind in perception and action. C. Moore & P. J. Dunham（Eds.）Joint Attention: Its Origin and role in development（pp. 29-40）New Jersey; LEA.

Cooper, G., Hoffman, T., & Powell, B. & Mavin, R., 2005 The circle of security intervention Differential diagnosis and differential treatment In L.J.Berlin, Y.Ziv, L. Amaya Jackson & M. T. Greenberg（Eds）, Enhancing early attachments: Theory, research, intervention & policy. Gilford Press, pp127-151

Dunham, P.J, & Moore, C.,（1995）Current themes in research on joit natttention. In Moore. C. & Dunham, P.J.（Eds.）, Joint attention; its origins and roles in development. pp15-28

Erickson, E.H. 1950 ／ 1960　仁科弥生訳　幼児期と社会　みすず書房

原田正文編著　2018　親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんが来た”　日本 PB プログラムセンター

片岡　直樹　2009　テレビを消したら子どもがしゃべった、笑った　メタモル出版

黒木美沙・大神英裕（2003）共同注意行動尺度の標準化 Kyushu University Psychological Research, VoL4, pp203 － 213

日本小児科学会　2004　乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です　日本小児科学会誌 108:709-712,

大藪泰（2004）共同注意の種類と発達　大敷泰ほか（編）共同注意の発達と臨床第 1 章　川島書店　pp. 1-31

大藪泰（2014）乳児の共同注意の研究パラダイム―人間の心の基本形を探る―早稲田大学大学院文学研究科紀要 .59, pp5-20,

Scaife & Bruner,（1975）Joint visual attention. The capacity for joint visual attention in the infant. Nature, 253, 265-266.

Tomasello, M.（1993）On the interpersonal origins of self-concept. In U. Neisser（Ed.）, The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge, 174-184. Cambridge: Cambridge University press.

Tomasello, M.（1995）Joint attention as social cognition. In Moore, C., & Dunham, P..（Eds.）Joint

attention : Its origins and role in development. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates, pp103-130.

Trevarthen, C. & Hubley, P.（1978）Secondary intersubjectivity: Confidence, confinding and acts of meaning in the first year. In A. Lock（ed.）, Action, gesture and symbol.London: Academic Press.

矢藤優子 2007 乳児と母親のおもちゃ遊び場面における注意の共有と母親の発話発達心理学研究，18, 1, pp. 55-66

（受付日 : 2019. 12. 10）